美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2017 November/December

TAKE FREE

NO.44

特集

時代を駆けた笑顔

庄内憧憬

白崎 映美 歌手

Cradle 11 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

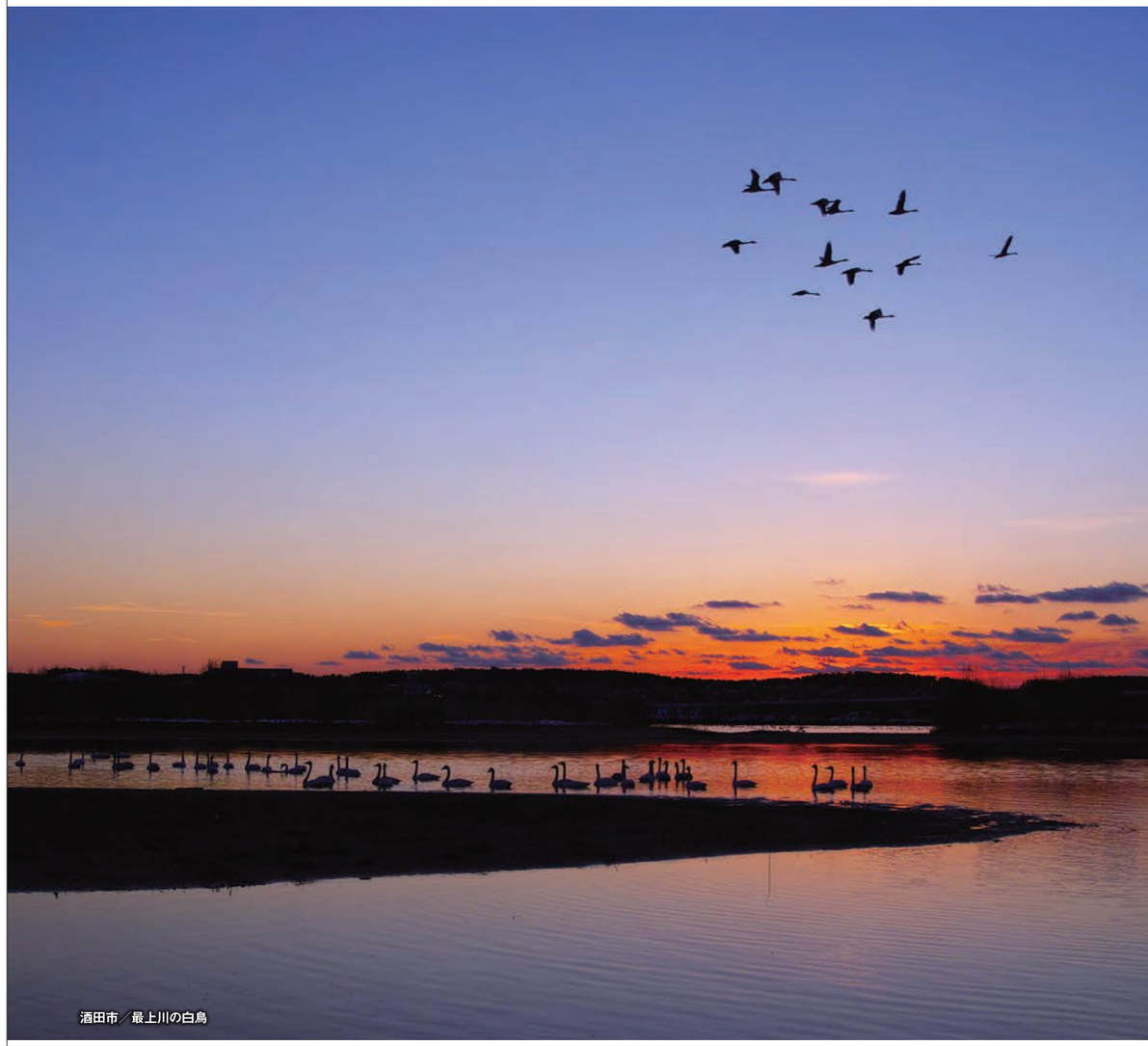
2017 November/December

平成29年11月1日発行（隔月奇数月発行）第8巻第6号（通巻44号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-69-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



酒田市／最上川の白鳥

白き使者 庄内に運ぶ 冬の気配

荘内銀行

東北さいい事（ごと）いっぺ来い！

白崎 映美

「まつろわぬ民（たみ）」と呼ばれたオラ方（がた）東北人。
みんなさいい事いっぺ来い来い来〜い！て歌います。
世界のどごさもね、わくわくのオラ方の東北、庄内を
みんなで創っていぎましょでの。

東京から酒田さ帰るたびに、空が広くて清々する。新潟から乗り換えて特急いなほさ乗って、海が見えてくると心が躍る。飽きもせず窓さへばりついで、ずっと眺めでいます。なんと広い海と空。輝きながら風に揺れる稲穂の絨毯と、雲から漏れ射す太陽の光を見ていると、神様はいるんでないか、という気持ちにさえなってきます。

幸せ。

こんな田舎やだ、と思って高校卒業してオラ東京さ出ました。出た途端に東北コンプレックスで無口でもじもじになってしまいました。そんな私に、言葉があって、文化があって、根っこがあっていいね、うらやましい。と言ってくれたのが上々颱風でした。

え、本当？

初めて自分が生まれたところと向き合うことができた気がします。ライブのMC（おしゃべり）も私が酒田弁で話すとお客様との距離がぐっと近くなります。なぜに東北人は、コンプレックスを持ち続けなければならないのか。

東日本大震災。オラ方（がた）ど同じ言葉を持つじっちゃんが「だいじょんぶです」と泣いていた。大丈夫でなくても大丈夫と言ってしまう、オラ方東北人。オラ、テレビの前で泣げできた。我慢づえぐで、恥ずかしがり屋の東北人は今こそでっけ声出す時来たんでねが！暗くて経済も悪くて田舎者と思われてきたオラ方東北さいい事（ごと）いっぺ来い！泣いでるじっちゃんさいい事いっぺ来い！ど思って、「東北6県ろ〜るショー!!」というバンドをつぐりました。日本のあちこちで酒田弁で歌っています。

昔、蝦夷と呼ばれ中央から攻められ、抵抗し、まつろわぬ民（たみ）（支配されない、迎合しない）と呼ばれたオラ方東北人。オラ方はコンプレックスなど持ついわれはない。知恵のあるやづは知恵出して、金のあるやづは金出して、力あるやづは力出して、世界さ誇れる東北を、ど思って歌っています。

海も山も川も広い空もとびきりおいしい食べ物も言葉も文化も〝白ばら〟もあるオラ方の庄内。みんなまた行きたいって言（ゆ）てる庄内。みんなさいい事いっぺ来い来い来〜い！て歌います。

このたび、酒田市よりふるさと栄誉賞なる賞をいだだきました。まんづもっけでございます。こいだばますます酒田弁さ磨きをかけでいがねばねの。世界のどごさもね、わくわくのオラ方の東北、庄内をみんなで創っていぎましょでの。

酒田“Night Spot 白ばら”で2013年8月に初開催となった「白崎映美&白ばらボーイズ」ナイトショー
（東北以北最後のグランドキャバレー、再生活動中）
撮影＝岡田和彦

しらさき・えみ／歌手。酒田市出身。1990年、上々颱風でエピックソニーよりデビュー。JAL沖縄キャンペーンCM、スタジオジブリ「平成狸合戦ぽんぽこ」映画音楽等、多岐に渡る活動で支持を集める。2013年上々颱風休止後、大所帯バンド「白崎映美&東北6県ろ〜るショー!!」「白崎映美&白ばらボーイズ」、流し「義理と人情」やさまざまなセッション、舞台やTV出演など多様なスタイルでソロ活動を展開中。昨年6月、自伝的フォトエッセイ『鬼うたひ』（亜紀書房）刊行。山形県酒田観光大使。2017年酒田市よりふるさと栄誉賞受賞。
◆公式サイト http://emishiraasaki.com/

特集
Special Edition

時代を駆けた笑顔

思い出すのはいつも笑顔。顔が見たくて、話がしたくて、足が向く。
行きたいお店があって逢いたい人がいて、そんなまちに生まれたことが
うれしくて、幸せに思える。そのことを、このまちで生きてきた人が教えてくれた。
いっぱい笑った表情のしわも、つめたい風に耐えた手のあたたかさも、
明るい光のようなその声も、ここで歳を重ねることの誇らしさを教えてくれた。
そのすばらしき人生を、その笑顔の中の言葉を、もっと私に教えてほしい。
今日あたり、逢い行てみっがな。

特集
時代を駆けた笑顔

先代マスターの教えを守り継いで

矢口孝子さん 南蛮居酒屋89

男性用のワイシャツに小柄な身を包み蝶ネクタイをつけてカクテルをつくる。御歳81の女性マスターに伺う夫婦の絆の物語。

「先代マスターである主人と店を始めてから今年で50年になりました。マスターは市民プールで水泳指導をしたりととにかく体を動かすのが好きな人で、ジャズのドラムもしていました。この店のインテリアやメニュー、BGMもすべてマスターのこだわりです」。そう語る矢口孝子（こうこ）さんは鶴岡で最も歴史あるバー「南蛮居酒屋89（やぐ）」を営む現マスターです。

東京出身の孝子さんが庄内町出身の幸彦さんと結婚し、夫婦でお店を開いたのは昭和42年。4歳と2歳の子どもを育てる30歳の時でした。接客の経験はあったもののカウンターの仕事は初めての孝子さん。慣れない仕事に最初の頃はよく失敗をしていたそう。「マスターはとても厳しい人で、お客さんの前でも平気で怒られていました。でもそれで落ち込んだら店が暗くなるから、あえて明るく振る舞っていましたね」。

鶴岡有数の繁華街で、家族4人でお店の2階に住みながら、マスターがカウンターを仕切り、孝子さんが洗い物をする。そんな日々が続いた平成5年のある日、孝子さんの体に異変が起こります。ウイスキーのボトルが3日もたないほどお酒が大好きだった孝子さんが、急にアルコールを受けつけなくなったのです。「病気かと思って検査を受けたんですが、どこにも異常がないと言われて。そしたら1週間後にマスターが亡くなったんです。うちの菩提寺の住職からは、私が1人になっても仕事ができるように、神様がマスターのいる間に飲めない体にして仕事を覚えさせたんだ、と言われました。今振り返っても本当に不思議です」。

以来22年、マスターの厳しい教えを守りながらお店を続けてきた孝子さん。現在は長男家族と暮らす自宅から自転車でお店に通い、日中は氷のこぎりとアイスピックで氷をつくり、約5時間の営業を経て夜中に帰宅する毎日を送っています。「休むと翌日の営業が疲れるので年中無休です。お店に入るとマスターの写真に向かって『おはようございます。今日も頑張るからね』と挨拶して、帰る時は『店を守っててね』って言うんです。この建物にマスターの気持ちが入っているのか、ワイシャツに着替えるとマスターが隣にいる気分になって気が引き締まります。この店にいることが、自分の癒やしや支えになっているんです」。先代がいた頃と何ひとつ変わらないお店でカウンターに立つ孝子さん。ご夫婦の時は今もこの空間で刻まれています。

スミノフウォッカとトニックウォーターにレモンが入ったスカイ・ボールはお店の一番人気。通称「ひゃっこいの」と親しまれ、キンキンに冷えた専用の銅製マグに手作りの氷でいただく。

冷たさが重要なカクテルは、5分以内に飲み干すのが大切。
孝子さんはオーダーの時に飲むスピードもお客さんに確認しているそう。

住所　鶴岡市本町2-15-23
営業　18:00～22:45
休み　年中無休

ワイシャツに着替えるとマスターが隣にいる気分になって気が引き締まります。

店名「89」は先代マスターの愛称から。写真は25年ほど前にお客さんが撮ってくれたというお二人の姿。

特集
時代を駆けた笑顔

はつらつと商都を生きる酒田の看板娘

樋田ミツ子さん
樋田屋

ふるさとの味を看板に掲げて商人として母として時代を駆けた時代を駆けたまちのお母さんの奮闘と繁盛記。

棒鱈、かすべ、アラメやいぎす、これらの乾物を扱う「樋田屋（といだや）」は、明治5年、酒田市の中通りで創業しました。140年来続く老舗の半世紀を支えてきた樋田ミツ子さんは、今年米寿を迎えた看板娘です。

山椒小路（現在の希望ホール界隈）の材木屋に生まれたミツ子さんは、戦中に女学校時代を過ごし、樋田家に嫁いだのは24歳の時。ご主人は国鉄に勤務し、ミツ子さんが家業に入って一から仕事を覚えました。

「その頃、乾物屋は何十軒もあっての。塩引き鮭やら筋子やらがいっぱい売れたもんだけ」。卸売もしていた樋田屋には、毎日100人もの小売商が買い付けに訪れたそう。その〝背負子さん〟たちが新庄や温海方面と方々へ商いに行くため、ミツ子さんは汽車やバスの発車時間までに荷物を積んで走り、冬はツルツルに凍った道を駅まで疾走。「今日こそは転ばねぞと思っても必ず転ぶなよ（笑）。落ちた荷物を直してる間に汽車が来ての。発車する汽車めがけて荷物を投げだもんだ（笑）」。ミツ子さんが寝る間もなく働いていたその頃、酒田の中心地には人がひしめき合っていたそう。しかしその光景も酒田大火を機に変わっていきます。樋田屋に総菜を納めていたお店も商売を縮小し、ミツ子さんは自ら「エゴねり」を作って売るようになりました。するとそれが評判を呼び、昭和55年に現店舗を構える頃には「ミツ子さんのお総菜」もお店の看板商品となりました。

現在、樋田屋は長男の光男さんと奥様の由美子さんが受け継ぎ、その味を守っています。ミツ子さんは隠居生活をしながら時々店頭に出たり、外に出かけて同級生と昔話を楽しんでいるそうです。「私たちはいっぺ働いだの。自分で自分さ表彰状くんねまねのって笑てんな（笑）」。よく働き、よく笑い、泣くのはこらえて、懸命に生きてきた昭和一桁生まれの酒田の女性たち。ミツ子さんのもとに「おかあさん、いっだが～」と会いに来たたくさんの人たちは、心の中で感謝状を贈っているはずです。

昔の逸話を笑って話すミツ子さん。「そのうち朝ドラさなるの（笑）」と話す光男さんと由美子さんが、慣れ親しんだお母さんの味を再現しています。

駅へ商品を届けるのが仕事でした。「朝5時前に店開げで、朝一番の汽車さ合わせて荷物運んで。帰ったら御用聞きさ行って。1分の暇もないようなもんだけの」。商売は繁盛し、ミツ子さんも育児に仕事にせっせと励む中、お店を切り盛りしていたお義母さんが若くして他界します。以来、店の看板はミツ子さんが背負うことに。2人のお子さんを自転車に乗せて

エゴ草についた海藻やごみをきれいに取り除くのはミツ子さんの仕事。「お友だちが来たら喋りながら2時間もこうしてます」。

私は働くことが好きでの。自分のいいように仕事ができて、それが何より楽しかったけの。

棒鱈煮、たまご寒天、田作りと、お正月やお盆に限らずふと食べたくなる味。お店にさまざまな総菜が並びます。

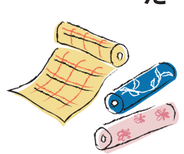
住所　酒田市中町1-14-34
電話　0234-22-1161
時間　7:00～18:00
休み　日曜祝日、1/1～3

特集
時代を駆けた笑顔

日本の伝統の装いと心を伝えるために

佐藤達子さん 都美屋

装いは、礼節と心。
戦前から戦後にかけて
和装から洋装へと
移りゆく中、
女性たちの心に
美しさを纏わせてきた
文化伝承の商いの形。



「着物は日本人の民族衣装。外国の方たちが国の衣装を堂々と着るように、日本の伝統を次の世代に残していけたらと思います」と話すのは、酒田市中町の呉服店「都美屋（とみや）」代表の佐藤達子さんです。戦前から昭和50年代まで、庄内には多くの呉服店がありました。都美屋もその一つで、来年で創業80年を迎えます。

山形市の地主の家に生まれた達子さんは、女学校を出るとタイピストの専門学校へ。公務員を志していましたが、呉服商を営むお兄さんの強い希望で昭和24年にこの道に入りました。「何もわからず酒田に来て『いらっしゃいませ』と商人の挨拶を覚えることから始めました。兄は商才に長けていて、毎日山のように仕事がありましたね」。呉服商の仕事で特に求められるのは、お客様一人一人への確かな「見立て」。達子さんはその知識を先輩社員の仕事から学びました。「あのお客様にはこの着物、あの方はこの寸法と、呉服のために生まれてきたような女性の先輩がいて。皆さん酒田生まれの酒田育ち、着物のことから庄内の慣習まで何でも教えてもらいました」。

「酒田の方は装いをひけらかさない、奥ゆかしさが素敵です」と話すのは長女の圭子さん。達子さんが期待を寄せる都美屋の次代です。

住所　酒田市中町1-3-33
電話　0234-22-7733
時間　10:00～18:00
休み　不定休

やがて高度経済成長を迎えると、着物は飛ぶように売れる時代に。都美屋にも料亭の女将さんが大箱を携えて買い付けに訪れ、女中たちは毎日さまざまな着物でお客様をもてなしたといいます。大衆呉服から高級品まで多くの店がしのぎを削る中、都美屋は高級呉服店としての色を濃くしていきました。「兄がその路線を突き通したことで、酒田から秋田へとお客様が広がっていきました」。お兄さんは秋田に出店、達子さんは結婚し育児に励む中、さらに酒田店を任されます。そして経営も安定した頃、酒田の中心地を大火災が襲いました。昭和51年の酒田大火です。都美屋の店舗は全焼、しかし先輩社員らの素早い判断で、商品は炎を免れました。「子どもたちの賞状やアルバムも『二度はもらえないものだから運べ』って言ってくれて。物心ともに助けられました」。そして大火後、仮店舗での営業を再開すると、連日多くのお客様が訪れたそうです。「お客様たちが買い支えてくださったんです。今振り返っても私は人に恵まれました。商売というより、人と人とのつながりをもらった気がします」。呉服店の仕事は、人の想いを装いで表すこと。「見立て」でお客様の心に寄り添い、心を通わせるこの仕事そのものが、日本の伝統の美しさを映しているかのようです。

几帳は間仕切り用の調度品。60年ほど前、酒田まつりの神宿を務めた際に仕立てた京友禅は、今もお祭りやお正月の時にお店に飾られます。

お孫さんの代までずっと来てくださる方がいてありがたいです、本当に。

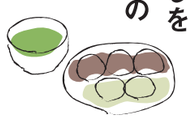
都美屋は染物屋から呉服店に発展。「兄は才覚があっておしゃれな人。私は兄についてきただけ（笑）」と達子さん。

特集
時代を駆けた笑顔

羽黒山中に唯一残る茶屋として

高城静恵さん 羽黒山二の坂茶屋

杵と臼でつく力餅。
由良産天草のところてん。
石段突破の認定証。
羽黒山の二の坂茶屋で
心のこもったおもてなしを
続けるのは、この道60年の
高城静恵さんです。



２４４６段の石段を登って参拝する羽黒山。その中ほどに位置する二の坂茶屋では、急坂に息をあげて辿りつく参拝者を元気なお母さんたちが出迎え、絶景と力餅でもてなしています。この台所を切り盛りするのが今年82歳の高城静恵さん。「修行と体力づくりをかねて毎日ここまで登っています」と笑顔で話します。

二の坂茶屋の1日は、朝8時頃に高城さんたちが食材を背負って石段を登ることから始まります。電気がなく冷蔵庫が置けないためドリンクを冷やす保冷剤も一緒に運び、茶屋についたら餅米を炊いて杵と臼で餅をつきます。お手製のあんこを作り、由良の天然天草を煎じてところてんを作り、店構えを整えてお茶を沸かし、参拝者を迎えます。そして夕方に店じまい。この日課を4月下旬から11月上旬まで毎日行います。「昭和50年頃までは水道もなかったので、離れたところから水を天秤棒で運んでいました。今も大変さはあまり変わらないけど、一年中じゃないから頑張れるんだと思います」。

共に働く高城千賀子さん（左）と原口富美さん（右）は、ご長男のお嫁さんと実の娘さん。二の坂茶屋は3人の女性パワーに包まれている。

羽黒山の参道に石段が整備された、江戸前期から続くという二の坂茶屋。羽黒町手向の高城家は、この茶屋を代々継ぐ家です。そこに静恵さんが酒田から嫁いだのは昭和32年のこと。当時は一の坂と三の坂にも茶屋があり、山中は参拝客であふれていました。しかし羽黒山に有料道路が整備されると車で向かう人が増え、次第に石段を歩く人が減るように。他の茶屋も山頂駐車場に新しく建てられた建物へ移っていきました。「うちもお客は減るし、茶屋を営むのも容易でないものだから移ることを考えたんだけど、家族会議の結果やっぱりここがいいとなったんです。だから我慢してずっとここにいるわけ（笑）。でも今は、茶屋を楽しみにして来たって皆さん言ってくれるので、嬉しいし、ありがたいことです」。

全国各地からいろんな人が来てくれるから、こうやって茶屋に来れるだけでも幸せです。

参拝者の貴重な休憩所である二の坂茶屋。同時に茶屋にはもう一つ役割があります。「石段登って具合が悪くなる人もいますから、ＡＥＤを置いています。それに気になる姿勢で降りてくる人がいたら、石段から落ちてしまわないようにここで休むよう声をかけています。昔から茶屋は、具合が悪くなれば『茶屋があって良かった』、私たちも『来てもらって良かった』という助け合いの心で成り立ってきたものですから」。そう話す高城さんの笑顔には、山中に唯一ある茶屋の責任感と逞しさ、そして大きな優しさがにじみ出ていました。

大正10年に撮影された二の坂茶屋。茅葺（かやぶき）屋根のこの建物は昭和50年代まで使われていた。

茶屋のおすすめは、きなことあんこの力餅とお抹茶のミックスセット。杵と臼でつく餅はコシがあって、まさに力餅。

住所　鶴岡市羽黒町手向羽黒山
　　随神門より徒歩25分
電話　0235-62-4287
営業　4月下旬～11月上旬
休み　期間中は無休（強風時は休み）

庄内写真季行 31

鶴岡市上本郷地区

虫も人も冬支度に勤しむ晩秋。こんなに穏やかで明るい日は何事にも代えがたい。

秋深い山里にて。

傾いた日差しを受けて、限りある命と知りながら静かに羽を休める赤トンボ。冬の長い安住の居を求めてさまようカメ虫。競うように乱れ、飛び交うハチの群れ。ひと夏の収穫に感謝の思いを込めながら、冬に向けた食を備える里の人。透きとおる青空に、小さく真っ白な浮雲がうかんでいる。

じきに訪れる厳しい季節を前にして、こんなに穏やかで明るい日は、何事にも代えがたい。

写真・文＝黒井 卓也

アトリエかおるの山ぶどうの三つ編みバッグ

使えば使うほど
つややかな飴色に変化することから
根強い人気を誇る山ぶどうのバッグ
しかし！ この鶴岡発のバッグは
ひと味もふた味も違うようだ

人間が足を踏み入れられないほどの山奥で、周囲の樹木につるを這わせて成長する山ぶどう。山の人々は古くからこの皮を使って籠を作り、山仕事などに使ってきた。だが現在はこのつるを採取すること自体が困難を極め、また籠を編むにも相当の力と熟練技が必要なため、作り手の高齢化に伴い、もの自体が希少なものとなっている。

つる細工作家の齋藤かおるさんが山ぶどうのバッグを作り始めたのは20数年前。山麓で育ったかおるさんにとって山ぶどうは身近な存在だった。だがいざバッグを作ろうと思うと、定番の網代編みとは異なる優雅でやさしい印象のものが作れないか考えあぐねるように。そして考案したのが、皮をこれ以上できないほど細かく裂き、三つ編みにして編み込む方法だった。かおるさんは早速山ぶどうの籠の作り手を探し、つるの採取方法や扱い方を習いに行った。「これは男の力仕事だ。女には無理だ」と言われてもあきらめなかった。こうして誕生したのがこの三つ編みバッグである。

現在、かおるさんは毎年6月、山を管理している方々と協力しながら山奥でつるの皮を確保している。そして厳選した皮を細く切り裂いて、数十メートルもの三つ編みへ。1カ月かけてバッグを編み終えると、仕上げに山ぶどうの花をイメージしたチャームと山ぶどうの皮で染めたインナーをつけ、「可愛がってもらってね」と心待ちにしているお客さまに送り出している。そのバッグはきっと今後、持ち主の愛情でなめらかに艶やかに成長していくのだろう。山奥の山ぶどうが大自然に育まれて、じっくり成長するのと同じように。

ご注文はホームページや電話、メールから。再来年の5月まで予約が入っているため、お手元に届くまで時間がかかるとのこと。他、山ぶどうを使った商品には財布やアクセサリーも。あけびやクルミ、猫のまたたびおもちゃもあります。アトリエを来訪する際は事前に連絡をしてください。

オンラインショップ●http://www.atelier-kaoru.com
アトリエかおる 0235-24-6415
（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

竜田姫の待つ田麦俣を歩く

庄内平野の稲刈りが始まる頃
月山の稜線の上に十五夜が懸かる。
雨上がり月から真っ直ぐに伸びた
光の道が天空から降りて来る。
月光に浮き上がる月山ほど美しい山はない。

季語
竜田姫（たつたひめ）
春の佐保姫に対し、野山の紅葉を染めなす女神といわれている。

田麦俣集落

国道112号を鶴岡から山形へ向かう途中の湯殿山IC近くに、月山を望む絶好の場所がある。清々しくも爽やかな風に芒（すすき）は歌うように揺れ、その傍らで秋の蝶が秋桜と戯れていた。今は交通量も多いこの道は、古くは近くの旧道六十里越街道として庄内と内陸をつないでいた。

静かなる自在の揺れや十三夜
―松本たかし

国道から田麦俣の標識に従い旧道に入る。田麦川にかかる橋を渡ると茅葺屋根の二軒の多層民家が目に入る。湯殿山信仰が盛んだった江戸時代、参拝客の宿場として栄えた田麦俣は、明治時代になると参拝客が激減したため、新しい生活のすべとして養蚕を始めた。そのために改築された兜造り四階建ての屋根の反りが美しい。現存する1軒は民宿を営み、もう1軒は昭和49年4月「旧遠藤家住宅」として山形県有形文化財に指定されている。

多層民家の室内

茅葺屋根と古草

「たにしの楽校」の階段

田麦俣から望む月山

こすもすや兜作りの大藁家
―あべ小萩

多層民家の中は昼間でも薄暗く、1階の土間には数多くの生活用具が並ぶ。今は使われなくなった用具の一つ一つには、意図的な美術品にはない「用の美」がある。その造形には先人の知恵と文化が備わっている。三階に上がると「高八方」から優しい光りが差し込み、当時のお蚕さんとの暮らしがうかがえる。外からの話し声に誘われて表へ出ると、屋敷の裏手で三人が茅葺の葺き替え作業をしていた。見上げると古い茅葺屋根には古草が茂っていた。文化財を守るためには、こうした日々の手間を欠かすことはできないという。

花さびた岩にやすらふ猿親子
―阿部月山子

かつて田麦俣には多くの人が往来し、番所となった場所には今も大きな時計が変わらず時を刻んでいる。その先の旧大網小学校田麦俣分校跡に「たにしの楽校」がある。元気な笑い声が響いていたであろう階段の手すりは手艶で黒く光り、子どもたちがすべり台にしていたものと思いを巡らす。

街道を進むと、「蟻腰坂入り口」が現れる。ここは、蟻が腰を曲げて登るほど急な坂が続く。その先の七ツ滝を望むところに句碑が建つ。そこを訪れた人の足跡を刻み、道々はただひっそりと続く。

龍田姫月の鏡にうち向ひ
―青木月斗

時代の変遷とともに今は静かに時間を刻む田麦俣。しかしそこには確かに、暮らす人々の変わらぬ想い、自然への畏敬の念、次世代へ残すべきものを守ろうとする姿があった。

間もなく、美しい錦繡の秋を迎えた後、また雪深い冬が田麦俣にやってくる。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）